

神様に富む人(ルカ 12:13-21)

普通に人々は、財産、つまり経済的に余裕があれば 人生安泰だと思いがちです。それは経済だけのことではないでしょう。健康さえあれば、他にいろいろ取り上げられるかもしれません。しかし、本当にそうなのでしょうか。今日の聖書には、それが愚かなことなんだというようなことをイエス様はおっしゃっています。イエス様が弟子たちに、また群衆に向かって非常に大切なメッセージをしていらっしゃるときに、群衆の中の一人が出てきて、「イエス様、いま遺産相続の問題で兄が変なことをやっているの、正しくそれを分けて、私の分をもらえるように言ってください」とお願いしたわけです。そのときにイエス様は、今そういうことを言われるような雰囲気ではないのに、メッセージをしていらっしゃるのに、そこで突然出てきてそのようなお願いをしていることにイエス様は怒りをあらわにして、誰があなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。わたしはそのためにここにいるわけではないよと。わたしのことを未だに全く分かっていないし、誤解しているんだなという意味でお話をしながら、貪欲を避けなさい。貪欲に気をつけなさいとおっしゃいました。ここで貪欲というのは、何かに対してものすごい欲張りという意味もあるでしょうが、単純にそのような意味ではなくて、神様で満足できないまま違う何かを求めることを貪欲といいます。それを気をつけなさいとおっしゃって、そのために例え話をされました。ある金持ちの畑の仕事が豊作になり、収穫があり余るぐらになって、畑の主はどうしよう、嬉しい悲鳴ですよ。倉庫が狭いので、今回の収穫を全部入れることができない。どうしよう。よし、今の倉庫を壊して、もっと大きな倉庫を建てて、そこにこの収穫を全部入れて、それから財産もそこに全部しまっておけばそれでいいのではないかとルンルンしながら考えていたわけです。その収穫があったときに、それをどうするかという対策を立てることは別に悪いことではないのではないのでしょうか。皆さんにいきなり 10 億円が入ってきました。これどうしよう。このままタンスにしまっておけば盗まれるかもしれないので銀行に預けようか。ちょっと利子のあるところがいいとか考えることは悪くありません。対策を立てることにしておっしゃっているわけではありません。しかし、彼はそのように考えて、それからこのように言います。「わがたましいよ。いまあり余るほど財産、収穫、経済的に余裕があるので、いっぱいたまっているから、もう休め、楽しめ」と。つまり、自分のあり余る収穫、経済の余裕、財産の豊富というものが、自分の人生を安泰にしてくれるし、幸せにしてくれる、それで大丈夫と思ったわけです。それに対してイエス様は、「愚かなものよ。お前のたましいは、今晚取り去られるようになるよ。となると、お前がこれから倉庫を壊して、そこにいっぱい貯めて、残りの生涯、その余裕をもって 安泰、そして楽しく安心して暮らそうとしている、そのすべてが何とむなしいことになるのか。、誰のものになるのか」とおっしゃったわけです。彼は経済の余裕、財産の豊富によって自分の人生は安泰になるし、幸せに過ごせると思っていたのですが、人間の幸せ、人生の安泰というものは財産の豊富さにあるものではないということをおっしゃっているわけです。なのに、私たちはみなそういうふうに思っているわけです。だから、そのお金のために、経済のために、人生の安泰のために偶像崇拜をしたり宗教に走ったりしているのではないのでしょうか。イエス様がおっしゃっているのは、その人間が頼りにして自負しているすべてがいのちあつてのことではないのかというお話なのです。いのちが何より大切なんだという話をしていられっしやるわけでは、ではありません。そのいのち、たましいと表現されていますが、それは財産があるから与えられるものでもないし、財産があるからいのちが伸びるわけでもないわけです。でも、いのちがなくなってしまうと、自分が頼りにして、また自分が自慢していたものが何の意味もなくなってしまうのではないのでしょうか。なのに、みなそのように思わないわけです。このいのちというものは財産によって左右されるものではないし、そのいのちはどこから来て、誰が取っていくのかということです。あなたがいま想像し考えているそのすべてが、いのちあつてのことでしょう。そのいのちは創造主の神様から与えられて、神様が時刻表に合わせて定められたときに持っていくものなのです。それも知らずに、財産があるから、経済的に余裕があるから、それで自分の人生は安泰で幸せなんだと思うことは、なんと勘違いであり、愚かなことなのかということをイエス様は今おっしゃっているわけです。ならば、人の人生の平安と幸せ、その鍵は一体なのではないのでしょうか。この例え話に出てくる人、またイエス様にお願いをしていた軍衆の一人は、財産などにあると思っているわけです。言葉でそう言うのか言わないのかは別にして、本心はみなそのように思っているわけです。残念なのは、クリスチャンの私たちも全く同じ考え方を持って人生を生活している、イエ

ス様のお話が耳に入っていないわけです。今も神様はクリスチャンの私たちを愛して、何が本当の人生の平安と幸せの鍵なのかということをおっしゃっているのに、それを与えようとしていらっしゃるのに、聞く耳を持たないで、遺産をちゃんと分けるようにイエス様をお願いをして、そういう祈りばかりしているのです。私たちがイエス様のことを、神様のことを調停人に行っているのではないのでしょうか。そうしているかどうかは気づかないまま、ずっと教会生活を過ごしていくわけです。そこにイエス様はブレーキをかけて、それではいかんと、そこを修正しないといけません。そこを修正しないと、本来クリスチャンに与えられている本当の祝福、聖霊が臨まれると、地の果てにまで、わたしの証人となるという約束の祝福までたどり着けないわけです。教会に幾ら長年通っていても、内側にある神を離れたときに目に見えないサタンによって植え付けられたそのやぐらが壊れない限りは、新しいクリスチャンの勝利の人生は私とは無縁のまま流れるようになるということ、ぜひ心に覚えていただきたいと思います。今日、イエス様は、そういう意味合いをもって例え話をし、それを周りで聞いている弟子たちに聞かせていらっしゃるわけです。あなたがたもしっかり聞いて、吟味して、自分自身を省みてくださいますとおっしゃっているわけです。

改めて問いかけてみましょう。人生の真の平安と幸せ、その鍵は何なのでしょう。

1. 平安と幸せの人生の鍵は、神様との関係回復にある。

今日の聖書を通して、第1に、人生の平安と幸せの鍵は、神様との関係回復にあるということをお忘れはいけません。

私たちがあまりにも頼りにして、またこだわっているそこにあるわけではありません。それが財産であれ、家族であれ、健康であれ、どういうことであれ、そこに私たちの人生の幸せと平安の鍵は存在しません。いのちあつてのことなのです。絶対忘れないように。すべてがいのちあつてのことです。学歴も才能も将来の展望も、いのちあつてのことなのです。

いのちが消えた瞬間、それは全部水の泡のようになってしまいます。違いますでしょうか。なので、これは明白なのに、この話に耳を傾けないのです。せめて、礼拝をささげているクリスチャンの私たちは、この明白な事実を目を覚まして、心に留めて、それから考えないといけません。本当に財産の余裕があれば、私たちは安泰で幸せな人生を歩いていけるのでしょうか。いのちあつてのことなのです。つまり、神様との関係回復なくして、幸せも安泰も喜びも希望も何も存在しません。人生の平安と幸せの鍵は、神様との関係回復にあります。神様との関係というのはどういうことなのでしょう。

1) 創世記 1:27-28

人間は創造主の神様によって造られたものです。しかし、他の被造物と獣とは違って、人間だけが神様と交わることができる霊的な存在として造られました。たましいのある唯一の存在です。それを神のかたちと言います。これが神様との関係です。神様が息を吹き込んで、私たち人間の内にいらっしゃって、人間は神様の代わりに地上を歩いて治めるような存在でした。神の力と祝福がそのまま人間を通して現れる存在でした。外見を見ますと、猿が進化したかのように見えるかもしれませんが。にもかかわらず、人間は最初から尊い聖なる霊的な存在でした。神様の代わりだったわけです。これが神様との関係です。しかし、残念ながら、目に見えない悪魔に惑わされて、神様に罪を犯して、この神様との関係がすべて壊れてしまうようになります。

2) ローマ 3:23、エペソ 2:1、ヨハネ 8:44、エペソ 2:2-3

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず」、結果、いちばん大切なたましいが死んだ状態になります。「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり」、それは裏返しますと、「あなたがたは、悪魔である父から出た者であつて」、悪魔の子どもと呼ばれる身分に変えられることになりました。なので、生まれてから死ぬときまで自動的に悪魔サタンが作り上げた世の流れ、偶像崇拜や宗教、占いなどに頼りつつ、滅びの道を歩むようになり、神の御怒りを受けるべき子らとして生まれるようになります。生まれたときから滅びの運命を抱えて生まれることになりました。神様との関係が壊れてこのようになってしまったわけです。

3) 創世記 3、6、11/使徒 13、16、19/6 つの運命

そのときから人間は神様を知らないで、神を拒否しながら自己中心になり、自分本位で生きることになります。つまり、自分が自分の人生の主人となり、目に見える肉体的なものが中心となり、この世界を中心にして考えて生きることになってしまいました。自分が自分の主人であり、目に見えるものに幸せを求めることになり、この世のものが目標になってしまいます。なので、それが当たり前になっているのですが、そのすべてが実は神様との関係が壊れて、神のかたちが全部壊れた結果なのです。もともと人間は神様とそのような関係だったので、自分中心ではありません。目に見えるものがメインではありません。この世界ではなくて、永遠の世界を中心に生きる者なのです。でも、それが全部壊れてしまい、自分本位、見えるもの中心、この世の目標に向かって偶像崇拜をせざるを得ないし、宗教にはまるしかないし、シャーマニズムなどに頼るようになるしかないものなのです。なぜ宗教が存在するのか。神様との関係が壊れているからです。なぜみなどここに拝んでお願いしたりするのでしょうか。なぜ占いなどにそんなにこだわるのでしょうか。神様との関係が全部壊れているからなのです。その結果、生まれながらその人は滅びしかない悪魔の子どもとして生まれ、身分そのものが、運命が定まることになりました。その結果、精神的にも肉体的にも、人生そのものも、しかも永遠の地獄に落ちる運命を抱えて生きることになり、このような滅びの呪いの運命が子孫たちに遺産として受け継がれることになります。だれひとりここから自力で抜け出すことができません。だから運命という言葉を使います。神様との関係が壊れて、人間がこのような回復不可能な滅びの状態にいることになりました。この滅びの状態を知らないで、イエス様に向かって遺産を分けるようお願いしますと、イエス様のことを裁判官や調停人のように扱うことになるわけです。イエス様のことをキリストとして信じて受け入れるのではなくて、イエス様に違うお願いをするということは、その人が今、人間の滅びの状態が何か全く分かっていないという裏返しなのです。全部が壊れてしまいました。神様との関係が壊れることによって、人生そのものが最初から最後まで、一から最後まで全部が壊れることになりました。しかも、回復不可能な状態に陥ってしまったわけです。しかし、このような神様との関係が壊れたということが分かっていたら、財産どうのこうのとか、他のいろんなテーマを取り上げる余裕などありません。神様との関係回復が人生において何より優先事項なのです。この群衆の中の一人、イエス様をお願いした一人は、今申し上げました神様との関係が壊れて人間が滅びの状態にいるということがさっぱり分かっていないということなのです。となると、結果的にこうなります。イエス様が目の前にいらっしゃるにもかかわらず、教会に来て礼拝をささげているにもかかわらず、愚かなことばかり考えることになります。人の幸せ、人の本当の問題の解決、人の人生の本当の意味での安泰、平安というものは、財産にあるものではなくて、神様との関係回復にあるということをぜひ覚えていてください。

4) 創世記 3:15、出エジプト 3:18、イザヤ 7:14、マタイ 16:16、I ヨハネ 3:8、ヘブル 10:14、ヨハネ 14:6

だから、神様は私たち人間を愛して、このまま放っておかないで、神様との壊れたその関係を回復するために、神様自ら約束されて動き出しました。いちばん最初から、女の子孫が生まれて蛇の頭を踏み砕くと約束されました。この神様との関係を壊してしまった超本人である目に見えない悪魔サタンの頭を踏み砕くこと以外には、神様のとの関係回復の道はありません。それを約束されました。幾ら財閥になったからと言って、その人がいくら長生きしたとしても、それが神様との関係回復とは全く 1 ミリも関係ありません。悪魔の頭が砕かれない限りは。それから、私たちの罪の代わりに、キリストが身代わりとして十字架で死ぬことによって、私たちは贖われることを約束されました。キリストの十字架によって罪が贖われることがなければ、神様との関係回復は不可能なのです。いくら修行しても、教育を受けてその人が心変わりしたとしても、罪は許されません。多くの人が、クリスチャンでも勘違いしているのです。勘違いしていると愚かにならざるを得ません。自分では賢く懸命に考えて計算して対策を立てるつもりなのですが、愚かなことになってしまいます。神様はレムナント教会の信徒ひとりひとり、小さなレムナントから年配の方に至るまで、そのような愚かなことやめて、本当の本物の祝福の中に入ることを望んでいらっしゃいます。そのためにさまざまな私たちには願ってもないいろいろなことが許されるわけです。それを見ないといけません。そういうふうすることによって、「処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」。神が私たちとともにおられる。そのことによって、インマヌエル、神様が

ともにおられる神様との関係を回復することになります。それが預言されていて、実際にキリストがこの世に来られて、その預言はすべて成就されました。その方がイエス様なのです。そのために十字架にかけられ死なれて、3日目に死の力を打ち破って復活なさいました。「あなたは生ける神の子キリストです」。イエス様こそ、そのキリストなのです。十字架の上ですべてを完了したと宣言されました。何を完了されたのでしょうか。神様との関係回復のための、人間には絶対できないこと、財産では不可能なそのことを成し遂げられたということです。「その悪魔のわざを打ち破るために、神の御子が現れました」。悪魔のしわざを完全に打ち壊して、ヘブル 10:14 には、キリストがご自分を一回ささげられることによって、永遠に私たちの罪のことを全うされたと宣言していらっしゃいます。そのようなことを成し遂げられました。それからイエス様ご自身がおっしゃいます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」。財産でもなくて、学歴でもなく、性格でもなく、才能でもなく、教育でも思想でもなく、努力でもなく、わたしを通してでなければ、世界中でこの御名の他に、私たち人間が救われる名として、どのような名も与えられていません。神様はキリストを通して壊れてしまった神様との関係回復のすべての祝福を備えられました。

5) 黙示録 3:20、ヨハネ 1:12、ローマ 8:2、I コリント 3:16、II コリント 5:17、ローマ 8:29

それから、そのイエス様がおっしゃいます。「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」と。この今申し上げましたみことばを通して、神様との関係回復のニュースを聞かせることで心のドアを叩いていらっしゃいます。聞いた人が、その心のドアを開いて「受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」。このキリストである神様との関係回復の唯一の道であるイエス様を心に救い主キリストとして受け入れることで、神様との関係が回復されるようになります。どのように回復されるのかと言いますと、ローマ 8:2 には、誰でもキリスト、イエスを受け入れた者は、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです」。今まで神様との関係が壊れて、悪魔の子どもとして滅びの運命にとらわれていたその人生が終わり、いのちと御霊によって導かれる解放された者になります。神様との関係に邪魔になるようなすべてが取り除かれることになります。イエス・キリストを受け入れることで。その結果、「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか」。神様がキリストを受け入れるその人に聖霊を通して三位一体の神様がその人の内側に入ってともに住まわれることになります。これで神のかたちを回復することになります。神様とのすべての関係が正常に戻るようになります。なので、大胆に宣言できます。「だれでもキリストのうちにあれば、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」。神様との関係が壊れていたその古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなると。それで、私たちのことをどういうふうと呼ぶのかと言いますと、ローマ 8:29 には御子のかたちにされた。御子イエス・キリストのかたちに。キリスト・イエスと一つになって、似たものとして回復できるようになります。それで、ローマ 8:15 には、そのときから今まで御怒りを受けるしかなかった人間が、神様のことをアバ、父と呼ぶことができるようになります。そのように関係回復になるわけです。人生の平安と真の幸せの鍵は、財産や私たちが頼りにしているところにあるものではなくて、いのちあつてのことで、つまり、神様との関係回復にあることを絶対忘れてはいけません。その関係回復は、キリスト・イエスの他に道はありません。他に何も要求されないのです。財産があるかないか、汚い人生を歩いてきたのか、真面目に生きてきたのか、一切関係ありません。キリスト・イエスしかありません。イエス・キリストを信じることによって、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなります。自分で新しくなったのかどうか気づかない人もいるでしょうけれども、キリストが十字架で死なれた以上、そのキリストを受け入れた人はすべて新しくなりました。神様をアバ、父と呼ぶことができるものになります。神様の人間に対する願いは、このようにキリストを通して神様との関係を回復するところにあります。私たちが健康なのか、金持ちになるのか、博士になるのか、良い会社に就職するのかなどは、神様の興味に関心には全く関係ありません。それは別の意味で考えないといけないものなのでしょうが、神様の唯一の関心、神様の最高の関心は、人々が壊れている神様との関係を、悪魔の奴隷になってしまった人間が神様との関係を取り戻すことに、神様のすべての関心があります。最大の目的なのです。と言いますのは、私たちに何かしらいろんな問題がやってきたときに、その間

題に私がどういう反応を示しているのかを見れば、理論でどういうふうに暗記してるかではなくて、教会に通っているかどうかではなくて、その問題の前で、何かしらの状況の前で、クリスチャン自分が反応している自分をしっかり顧みると、自分と神様との関係が今どうなっているかということがちゃんとチェックできるようになるわけです。そのために許されるものなのです。いくら一生懸命教会に通って、聖書を暗記して真面目に教会生活をしていたとしても、何かしら問題が来た時に、その問題の前で暴れて落ち込んでしまったり、また神を恨んだりというような反応があったり、思い煩ったり、誰かのせしったりということは、その問題がどうのこうの、その人が正しいかどうか以前に、その人が今、神様との関係においてそのレベルであり、その状態だという現れなのです。神様はそれをそのまま見過ごすことなどありません。全部露わにして、それを叩いて正して、正しく祝福される神の子どもとして整えられることを第一にしていってほしいです。私たちは財産をどうのこうのとお願いしているのですが、神様はあなたの霊的状态が大事なんだよと。キリストをどのように思っているのか。あなたは神様との関係はどういう状態なのか。そこが問われるわけです。

このように神様の恵みによりイエス・キリストを信じることで、Only イエス・キリストを信じることで神様との関係が回復できて、神のかたち、御子のかたちを回復した人は2番目です。

2. 勝利の人生の鍵は、神様に富むことにある。

これから勝利の人生が約束されています。状況、環境、条件がどうであれ、それと関係なく勝利の人生が約束されています。その勝利の人生の鍵は何でしょうか。これから神様に富むことに勝利あります。

神様に富む信者。神様に富む信者とはどういう意味なのでしょう。

1) 神様の富んだ愛にひざまずき

まずは、私たちの方から富む前に、神様から富んだ愛が注がれたことに気づいて、それにひざまずくところから始まります。私は神様からここまでこんなに愛されているのか。神様の愛はいかに富んでいるものなのか。それに気づいてひざまずくわけです。皆さんに対する神様の愛、罪人、地獄の子のために御子、神様ご自身であるイエス・キリストを犠牲にするまで私たちを愛してくださいました。それが神様の愛です。

①計り知れない愛

その愛は計り知れない愛です。

②理解不能な愛

私たちが知っている世の中の理論の中には当てはまりません。そこには入れることができない愛、理解不能な愛です。

③信じられる愛

ただ感謝のことに信じられる愛です。その神様の愛を皆さんの小さな頭でどのようにして理解して、計算できるのでしょうか。できません。計算不可能な愛です。その愛に圧倒されてひざまずくところから神様に富む人生が始まります。

④ただ感謝するだけ

なので、ただ信仰によって感謝するだけです。キリストを私のために十字架に引き渡されたその神様の愛を数字で表せるのでしょうか。何かの図式で表記できるものなのでしょうか。計り知れないもの、私たちの表現でこれぐらいしかできないのです。理解不能なそのような愛です。ある先生はいかれた愛という表現をしました。良い表現なのかどうか分かりませんが、気持ちはわかります。人と人の間の愛、愛情、親子の愛情等々からは例えることができない、そういう愛なのです。

2) 神の国の相続に驚き

①エペソ 1:3、18

その神様の富んだ愛にひざまずき、それだけでも一生感謝しても足りないものなのに、その愛によって、罪が許されただけではなくて、神の国を相続されることになりましたことに驚くことなのです。神の国を相続した。刑務所にいたパウロは言います。天にある霊的すべての祝福が与えられている。刑務所なのか外なのかと関係ない祝福なのです。刑務所という環境が邪魔できない、奪うことができない祝福なのです。天にある霊的すべての祝福。エペソ 1:18 には、「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか」。そういう神の国を相続することになりました。

② I コリント 3:16、エペソ 1:23、ヨハネ 15:5、17:21、ピリピ 3:20、マタイ 5:3、I コリント 1:30、ローマ 8:39

先ほども申しあげましたように、その結果、あなたがたは、聖霊が宿っている神の神殿であることが分かっていないのか。神の神殿と呼ばれる者になりました。なぜなら神の国を相続しているのです。エペソ 1:23 には、そういう意味で、私たちは個々の体のように見えるのでしょうけれども、キリストを頭にして、キリストの体なる教会と呼ばれる者になったわけです。わたしはぶどうの木で、あなたがたはその枝と言われるようにくっついていて関係になりました。ヨハネ 17:21 には、「父よ。あなたがわたしのうちにあり、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください」。不思議なことなのです。三位一体の神様の中に導き入れられた者になりました。これが神の国を相続したということです。当たり前について死んでも天国に行けるように保障されて、天の御国の国籍が与えられています。なので、この世にいるときに、信者の私たちに向かってこのような呼び方をしているわけです。あなたがたは王である祭司、世の光、まるでイエス様のようにと呼んでいるわけです。神の国を相続しているわけですから。つまり、御座の祝福が私のものであり、神様ご自身が私の内側にいらっしゃるのです。神のすべてが私のものになるわけです。それに驚くことなのです。幸せのために生きるよということは、もう私たちとは縁のないお話なのです。それで I コリント 1:30 を見ますと、「しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになりました」。このときから神の国を相続しているのです。お金がなくても、キリストが私の力、キリストが私の満足、キリストが私の清さ、キリストが私の誇り、キリストが私の喜び。キリストが喜びなので、喜びを奪うことができません。何かが変わるから喜びも変わる、そういう存在から変わりました。死の影の谷を歩いていても喜びは奪われないのです。なぜかという、死の影の谷が喜びの原因ではなく、安泰した環境が喜びの原因ではないから。キリストが喜びなので、死の影の谷を歩いていても私の喜びを奪われないのです。だから刑務所の中にいながらも私は喜んでいきます。頭がおかしい人間でなければ信者なのです。これが神の国を相続しているということです。すごくないでしょうか。神の国を相続したというのは、神様ご自身が私たちの相続なのです。何が足りないのでしょうか。何が欲しいのでしょうか。そして、感謝なことは、このような神の国を相続している救われた祝福は、ローマ 8:39 「高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」。永遠に奪われないし変えることができないものなのです。これに驚くわけです。神様の計算不能な愛にひざまずいて圧倒されて、しかも、神の国が私の相続である、私の遺産であるということに驚いてびっくりしてとなると、

③生きる理由が消え

その瞬間、今まで私が生きる理由を持っていて頑張ってきたのですが、その今までの生きる理由がなくなり、消えてなくなります。生きる理由がありません。今までは幸せのために、何かのために、何かのためにという理由があって生きてきたのではないのでしょうか。これから何かを目的にして、目標にして生きるつもりではないのでしょうか。しかし、この神の愛に圧倒され、神の国の相続、その祝福に驚いたときには、それが全部飛んでいって、私に関係ないもの、いらぬものなのです。

3) なぜ生きるのか？

だから、信者の場合は、生きる理由が見えないのが正常です。なぜ生きるべきなのかが分からなくなりま

した。できるだけレムナントのとき、小さいときからこの経験をしないとはいけません。生きる理由が今までは家族のためだったという人もその理由も消えてなくなります。自分の目標を定めて、それを達成するために、世の中の何かの有意義なことのために等々のことが全部消えてなくなるので、もう生きる意味も理由もないのではないのか。もうこのまま死んだ方がいちばん最高ではないのかと思うときに私たちは問いかけるわけです。圧倒されて驚いて、「神様。なぜ私は生かされているのでしょうか。今までの生きる理由は全部でたらめだったということがわかりました。ならばなぜ死なないで、召されないで、今生かされて生きているのでしょうか」と神様に素直に問いかけるようになります。

①この世(現場)を見なさい！

そのときに聞こえてきます。神様は必ずその人に言います。いま神様との関係が壊れたままのこの世界を、この現場を見なさいとおっしゃるのです。必ず聞こえてきます。それが聞こえてこない場合には、その人と神様との関係はまだ乏しい関係でしょう。日本の場合は、偶像にまみれて、それが文化、伝統だという勘違いして溺れて、しかも八百万の神々と言いながら、神を根底から否定する人間中心主義、ヒューマニズムの最高を走っているこの国です。それで災難が絶えないこの国。精神的な病気が世界トップであり、同性愛等々、世界のトップを走るそういう国です。この現場を見なさい。

②暗闇の奴隷となり、知らずに地獄へ

暗闇の奴隷となっているこの現場を見て、しかも何も知らずに地獄に向かって走っているその現場、そのたましいを見なさいと。それが見えてこない限り、なぜ生きるべきなのかの理由は見当たりません。だから、こんがらがってしまうか、ぼーっとするか、あるいは古き理由を持って生きるしかありません。それはクリスチャンとしての勝利の人生に最悪な邪魔なのです。クリスチャンの私たちはどれほど祝福されたのかと言いますと、神の国を遺産としていただいているので他に何もいらない、この世の中を生きる理由が消えてなくなるほど祝福されました。それで神様はそのときにおっしゃいます。現場を見なさい。さまよっているたましいを見なさい。地獄に向かってたましいを見なさい。みな自分なりに頑張っ、いろいろな口実を立てて一生懸命頑張っているのかもしれませんが、みな地獄に向かっていないのか。なぜそれが見えないのか。なぜそれを認めないのか。クリスチャンなのに。そこに必要なものはなんだろう。

③私を生かしたキリストの光(現場>地の果て)

お前を生かして、お前が助かったキリストのいのちの光しかないのではないのか。これからあなたが生きる理由は、あなたを生かして、あなたの内側にいらっしゃるキリストの光をあなたがいる現場から地の果てにまで照らすために生きるんだよ。それがあなたの生きる唯一の理由なんだよとおっしゃるわけです。そこに対してアーメン。生きる理由が分かったのでうれしくてアーメン。

④残りの生涯、全てを宣教に捧げ

残りの生涯、私のすべてを宣教に捧げます。私にある健康も才能も知識も時間もお金も、すべてを宣教のために捧げます。喜んで強いられてではなくて、喜んで捧げることになります。なぜならそれが生きる理由なので。宣教が生きる理由なので、勉強もお金も健康も家族も全部宣教のために許されているものなのです。そのように見方、解釈が変わるときに、全部聖なるもの、光の経済に変わるわけです。額がどうであれ、皆さんがこのような思いで献金を捧げるときに、その献金こそが光の経済であり、それ以外のものはサタンのパシリに使われるお金になるだけなのです。これを指して献身、神に富む人というわけです。これが神様に富む人です。

今日の聖書を通して、ぜひ残りの生涯、小さなレムナントひとりひとりを初め、年配の方に至るまで、神様に富む信者として勝利していただきたいと思います。

そのためにまとめましょう。天地がひっくり返っても、神様は私の父であり、私は神の子どもであり、すべての祝福が与えられていることを告白して感謝しましょう。つまり、神様との関係をしっかりと固めていかないとはいけません。揺れないように。それで残りの生涯、神様に富む人生を決断しましょう。なの

に今現在、自分はイエス様のことを財産の調停人にしていないのか、吟味してみましょう。何を祈っているのでしょうか。何を願っているのでしょうか。イエス様がおっしゃいます。その願いはいらないものなんだ。あなたがたは神のない異邦人ではないので、それはすべてご存知であっていらぬものなんだよ。神の国とその義を第一に求めなさいとおっしゃっているのです。神に富む信者、そして、その人生を歩いていきましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様ありがとうございます。今日も神様の願いである 237、5000 未伝道種族に向かって、世界福音化の契約のゆえに、御座のキャンプである礼拝を許し、そこに導いてくださったことを心から感謝申し上げます。どうかひとりひとりがその契約に用いられることができるように内側から整えられて、本当に神様との関係回復にフォーカスを合わせて、すべてを見て解釈することができるように。そして、残りの生涯すべてを宣教のために捧げる神様に富む人として勝利の人生を歩むことができるように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。